

評価のいろいろ

一年表作成を通して

山形県酒田第三中学校 小野寺雅昭

7 評価のいろいろ

(1) 絶対評価だからこそ

学習の評価をめぐり議論伯仲であるが、指導のねらいに照らすと同時に、生徒・教師にとって次のステップになる評価でありたい。生徒は納得できる評価を得ると、その信頼をもとに学習意欲が高まる傾向にある。従来社会科学習では、テストによる評価に依存しすぎて、生徒の活動や表現を正しく評価する機会が少なかったように思う。

生徒の側からすると、次のような評価への希望があるように思われる。

- ①授業ノートや作業ノートなどの内容で良いところを認めてほしい。
- ②レポートやテーマ学習のまとめシートなどでよくできたところを公表してほめてほしい。
- ③指定された地名や用語を完全に身につけた時は知らせてほしい。
- ④次はどんなところに気をつけて学習すれば良いか指摘してほしい。
- ⑤全体的に自分はどんな学習内容を得意としているか、教えてほしい。

(2) 新しい評価方法

授業で、どんな学習活動を展開させ、ねらいをどのように達成させるかが、評価方法の改善と表裏一体である。評価方法を見直すことで、学習活動も大きく変わってくる。そこで、筆者が日ごろ考えている、歴史学習での評価方法の一端をまとめたい。

<1>歴史を身近に感じる学習への評価

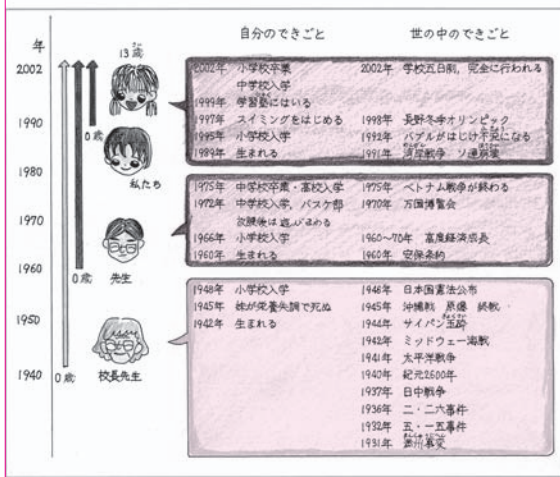
A. 生活史的な事象（家庭にある物品・衣食住）への接近

例 家庭にあるTVなどの家電製品・PC・車などの購入年代を聞き取る⇒年表に書き込む⇒自分の歴史（誕生⇒入園⇒入学等）を書き込む。
☆現在を身近な歴史でとらえられたか。

年表形式のレポートを提出させ、各時代を、このレポートと比較できるようにする。たとえば縄文

三つの時代の年表をつくってみよう

30年前（先生の中学時代）、60年前（校長先生の生まれたころ） ■調べ方
教科書や図書室で資料をさがそう。家族や地域の人の話を聞き、そのころの世の中のできごとを調べ、年表をつくってみよう。



帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p. 7

時代の生活であっても、衣食住の物品は比較可能なものもある。作成の動機づけとして、教師自身の生活史レポートの模範提示や、NHK TV「おしん」などを例にその生涯を語ることで、戦前の奉公時代と戦後、特に高度経済成長後の文化・情報の発達などを具体的な物を通して感じていく力を養成したい。

このレポートは、原始古代からはじまる歴史学習の導入の役割をはたし、関心・意欲態度向上のためにも重要と考えられる。1学期のはじめにこの学習を行うとき、4観点の内、「関心・意欲・態度」の評価では大きなウエイトを占めることになる。

B. 当時代社会のしくみ・構造を認識するための学習への評価

例 奈良時代の政治で、平城京の図面に、大きな働きをした建物（平城宮・東大寺・東西の市、等）を書き入れ（あるいはイラストのコピーの切り貼り）どんなつながりがあるか、参考資料（文章）を読んでまとめる。
☆歴史上の人物と政治の機能を把握できたか。

図面にまとめていくと、いろいろ気づいていく生徒が増える。参考資料はVTRでも十分であるが、生徒の認識スピードに合わせ、ポーズをとる必要もあろう。

この中学生流の構造図は、「社会的な思考」を高めるために適するように思われる。もちろん、作成にあたっては、人物名や歴史的なできごとについてある程度予備知識・理解をもっていないとできない。だが、学習の質としては、「社会的な思考」を課題としている。したがって、この学習を行う単元では、「社会的な思考」の評価を十分行って、生徒に還元していく必要がある。都の図面を作成する作業は、歴史の舞台である「場」をとらえる力を養成する。歴史がわかった、歴史が動いている、という感覚もできる。

<2>書かれた歴史の「正しさ」への認識づくり
C. 同じ事件についての各国の反応に違いを評価

例	ノルマントン号事件に関係する各国の評価を、当時の新聞の論調を通じてみていき、その違いがどんな背景から生じてきたか考察できたか。
例	明治維新の成果について、政府側と民衆側の考えを、当時の記録から評価する。

書かれた歴史像に対する評価ができる、という力は今後ますます重要になる。表面的な歴史事実を鵜呑みにする学習から、より慎重に当時の世相を背景に歴史観が生まれることにも中学生の段階から気づかせたい。そのために、当時の「新聞」などを資料に使い、歴史認識の違いに注目させ、深みのある学習にさせたい。そうした点にも学習の評価を及ぼしたい。

2 年表作成における評価

<2>のAを例に評価の手順を示したい。

(1) 学習過程と評価 (1時間扱い)

学 習 活 動	評 価
1. 教科書p.7を参考に、自分の歴史でおもなできごとを記入。 2. 家族(父母など)の生涯を記入。 3. 「おしん」やその他、有名な人の生涯を記入。	人物の生涯のあらましを年表化できたか。(記入内容で)

4. 冷蔵庫などの家電・PC・車などの購入年代を聞き取り記入。	聞き取りを行ってまとめたか。(同上)
5. 各世代の特色をつかむ。 ・戦前の貧困生活 ・戦後混乱期 ・高度経済成長期 ・バブル期	
6. 年表を色分けして分」できる。	自己評価を行っているか。(感想内容)
7. 作成してみたの感想を簡単にまとめる。	
8. 友だちの感想を聞く。	

(2) 評価による意欲づけ

こうした学習活動は、歴史学習全体の導入時に行うとよい。年表作成が、歴史の時代・時期区分を行うことであり、歴史を主体的に認識する有効な手段であることを実感させたい。また、はじめての本格的な年表作成で、生徒なりによくできた部分をコメントし評価したい。この評価は今後の歴史学習の支えともなるだろう。生徒は、この体験を忘れることなく、次の単元に進んでほしい。

(3) 4 観点への位置づけ

年間計画で、1年間の学習内容をバランスよく配置し、4観点に位置づける必要がある。この学習は「関心・意欲・態度」のウエイトがどのくらいか。「社会的な思考」をどのくらい求めて指導にあたるか。教師のねらいによって重点のおき方が違ってくるため、4観点への位置づけも変わってくる。それを指導の前に評価計画を立てておかないといけない。学習内容と表裏一体である。また、強調したいのは、評価が、細分化された評価項目の点数集成のみであっては、生徒に生かされず、今後の学習への意欲を喚起することができない。また、歴史学習の本来のよさを失ってはいけない。

学習活動でできた年表などの作品は、生徒自身がたいせつにストックしたい。そのための環境を整備する必要もある。年度当初に、記録保存の方法、個人用か学習用かも意識して考えておくこともたいせつである。学習時間がかぎられているからこそ、効果的な評価によって、自主的に歴史学習を行う生徒にしていきたいと願ってやまない。評価が生徒にとって大きな心の支えとなるように。